SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

中世チェコにおけるワインの宗教的・文化的位置づけ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学発酵とサステナブルな地域社会研究所 公開日: 2024-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤井, 真生 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/0002000592

中世チェコにおけるワインの宗教的・文化的位置づけ

藤　井　真　生

1，はじめに

周知のように、福音書の記述を根拠にパンとワインはキリストの肉と血であるとされ、古代から一貫してミサの必需品として重要視された。そのため、世俗領主だけではなく聖界領主（司教や修道院）もワイン醸造に注力したことは、これまでの研究でも十分に言及されてきたところである[1]。中世にキリスト教が地中海世界からアルプス以北へも伝播すると、教会や聖職者とともにワインもまた北進していくことになる。ところが、ワインの原料となるブドウは寒冷地では育たず、栽培には北限があった。地球温暖化の影響により21世紀現在ではその境界がやや北上しつつあるものの、少なくとも中世においてはドイツ北東部からチェコあたり[2]にかけてそのラインが引かれていた。偶然ではあるがこの線引きは、アルプス以北の中でも中世初期に改宗の進んだフランスからドイツ西部にかけての領域と、その後にフランク王国の働きかけによりキリスト教化していくドイツ東部および東中欧・北欧という区分と一致する[3]。

---

[1] ロジェ・ディオン「中世における聖職者によるワイン用ぶどう栽培と王侯によるワイン用ぶどう栽培」同（福田育弘訳）『ワインと風土』人文書院、1997年、119-153頁。とりわけ修道院に関しては、デズモンド・スアード（朝倉文市・横山竹己訳）『ワインと修道院』八坂書房、2011年が、会派ごとにまとめている。

[2] 現在のチェコ共和国でも、西部のボヘミアはより寒冷でビール中心の飲酒文化なのに対して、東部のモラヴィア、とりわけ南のオーストリアと国境を接する地域ではブドウ栽培が盛んでワイン文化圏に属している。なお、ボヘミアでもブドウは栽培している。

[3] この線引きはローマ帝国の国境線とも一部重なる。ワイン史家ディオンによれば、ローマ人は帝国領となったガリアにブドウ栽培を導入し、耐寒性のある品種の改良に努めた。ディオン『ワインと風土』、14-17頁。プリニウスは1世紀にウィーン周辺のブドウ畑が有名であること、ガリアでもいくつか産地があることなどを述べている。大槻真一郎他訳『プリニウス博物誌　植物篇』八坂書房、1994年、99-156頁。中世初期の段階では、生物学的な限界とは別に、栽培地域には食文化との関係も指摘できるだろう。さらにドイツ語圏での栽培については、ヒュー・ジョンソン（小林章夫訳）『ワイン物語・上』平凡社、2008年、195-200、245-252頁が補足している。

本稿は、ブドウ栽培不適地かつキリスト教化後発地である東中欧――ここではドイツの東隣に位置するポーランド、チェコ、ハンガリーの３か国を指す（チェコとハンガリーの間に位置するスロヴァキアは、中世においてはハンガリーに属した）――に着目し、ワインが宗教的、文化的にどのように位置づけられていたのかを探るものである。ただし、筆者の専門性という制限に加えて、後述するように史料上の制約もあり、実際にはチェコを分析の中心におく。

２，東中欧のキリスト教改宗

この地域に対する布教が本格化したのは９世紀のことであった。現在のスロヴァキアを中心として、チェコ、ポーランド、オーストリア、ハンガリーにかけて領域を拡大したモラヴィア国家――チェコ共和国東部のモラヴィア地方と区別して「大モラヴィア」と呼ばれることもある――に、フランク王国のカトリック教会とビザンツ帝国の正教会、双方から宣教師が派遣され、モラヴィア君主が改宗したのである[4]。とりわけビザンツから送り込まれたキュリロスとメトディオスの兄弟（「スラヴの使徒」）は、スラヴ語を表記するためにグラゴル文字を発明し、スラヴ語典礼を導入するなど、この地域のキリスト教化の進展に大いに貢献した[5]。メトディオスはその後、モラヴィアおよびパンノニア（のちのハンガリー）を管轄するシルミウム大司教に任じられた。彼は、教会スラヴ語の聖人伝では「モラヴィア大主教」、チェコの年代記では「モラヴィア司教」と表現されている[6]。しかし、メトディオスが亡くなると彼の弟子たちはモラヴィアを追放され、またモラヴィア国家自体もマジャール人の侵入により滅

---

[4] 日本語では、薩摩秀登「第１章　ドナウ・ヨーロッパの形成」南塚信吾編『世界各国史19　ドナウ・ヨーロッパ史』山川出版社、1999年、ここでは31-32頁。またチェコ語では、中世初期史を専門とするトゥシェシュチークが以下の文献で論じている。D. Třeštík, *Vznik Velké Moravy,* Praha, 2001; *Počátky Přemyslovců,* Praha, 1997, pp. 263-296.

[5] キュリロス（コンスタンティノス）とメトディオス兄弟に関しては、２人がモラヴィアに到来した1150周年記念に以下の文献が出版されている。M. Pavlík, *Cyril a Metoděj,* Praha, 2013, V. Vavřínek, *Cyril a Metoděj,* Praha, 2013. なお、彼らの活動については、どちらも９世紀末のうちにギリシア語で聖人伝が記され、それを教会スラヴ語に翻訳したものの写本が伝来している。２つの聖人伝はロシア文学者により日本語に訳されている。木村彰一・岩井憲幸「〈翻訳〉コンスタンティノス一代記：訳ならびに注(1)」『スラヴ研究』31号（1984年）、1-17頁、同「〈翻訳〉コンスタンティノス一代記：訳ならびに注(2)」『スラヴ研究』32号（1985年）、191-215頁、同「〈翻訳〉メトディオス一代記：訳ならびに注」『スラヴ研究』33号（1986年）、1-16頁。

[6] 木村・岩井「メトディオス一代記」。Kosmasův letopis český, I-10, in J. Emer (ed.), *Fontes rerum Bohemicarum (FRB)* II, Praha, 1874.

亡する。

モラヴィア国家滅亡後の混乱期に西スラヴの諸部族を糾合したのは、ボヘミアのプシェミスル家であった。プラハを本拠地とするプシェミスル家は、９世紀にモラヴィア国家へ臣従し、870年頃にボジヴォイ１世がメトディオスの洗礼を受けたとされる。ボヘミアでは、すでに845年に複数の首長がレーゲンスブルクで受洗しているが、名前の判明する君主としては彼が最初の人物である[7]。彼の妻ルドミラは、おそらくボジヴォイよりも先に改宗しており、夫の洗礼に影響を与えたと考えられる[8]。ボジヴォイの死後、息子のスピチフニェフはプラハ城内に聖母マリア教会を、ヴラチスラフは聖イジー教会を建立した[9]。そして後者の息子が、のちにチェコの民族的な守護聖人となるヴァーツラフである[10]。

ヴァーツラフは東フランク王ハインリヒ１世の支配を受け入れ、その恩賞としてザクセンで聖人として崇敬されていた聖ヴィトゥス（ヴィート）の遺骨を贈られた。彼はプラハ城内に聖ヴィート教会を建立し、ここがチェコの宗教的な中心地となる（のちに司教座、さらに大司教座が設置される）。彼は東フランクに反発する弟のボレスラフ１世により暗殺されたが、死後まもなくから奇跡が語られるようになったため、最終的にはボレスラフによってプラハに埋葬された[11]。遅れてキリスト教化した北欧、東欧では、キリスト教を受容した君主やその一族が聖人となる事例が多い[12]。ヴァーツラフは典型的な聖人君主であ

---

[7] 薩摩「ドナウ・ヨーロッパの形成」、37頁。

[8] 彼女は夫の死後に、孫ヴァーツラフの後見人としての立場をめぐって息子の嫁ドラホミーラと争いになり、暗殺された。ドラホミーラが異教徒であったこともあり、ルドミラは聖人視され、ヴァーツラフとともに教会スラヴ語およびラテン語で聖人伝が残されている。Životy sv. Ludmily a sv. Václava, in J. Emer (ed.), *FRB* I, Praha, 1873. Utrpení sv. Ludmily, in *FRB* I. ルドミラはプラハ北方のムニェルニークを本拠とするプショフ族の出身であり、ドラホミーラはさらに北方のストドル族の女性であった。この頃、西スラヴ諸部族の中に徐々にキリスト教が浸透しつつあるものの、部族により受容のタイミングが異なっていたことがわかる。ルドミラについては、最近論集も公刊された。J. Izdný a kol., *Ludmila kněžna a světce,* Praha, 2020.

[9] Život sv. Václava (Crescente fide), p. 183, in *FRB* I.

[10] ヴァーツラフ崇敬については、拙著『中世チェコ国家の誕生』昭和堂、2014年の第６章および拙稿「聖ヴァーツラフ崇敬の形成と利用」『秀明大学紀要』９号（2012年）、95-119頁。

[11] Životy sv. Ludmily a sv. Václava, Život sv. Václava (Crescente fide). ちなみに、前者（教会スラヴ語）は960年代に、後者（ラテン語）も970年代には成立していたものと考えられている。教会スラヴ語史料については、以下の英訳から引用している。M. Kantor, *The Origins of Christianity in Bohemia,* Evanston, 1990, pp. 61-65.

[12] G. Klaniczay, *Holy Rulers and Blessed Princesses: Dynastic Cults in Medieval Central Europe,* Cambridge, 2002. チェコ人史家の研究は多数存在するが、代表的なものとして以下の文献を挙げておく。F. Graus, St. Adalbert und St. Wenzel, in *Europa Slavica-Europa Orientails, Festschrift für Ludat H,* Berlin, 1980, pp. 205-231; *Lebendige Vergangenheit,* Köln, 1975, D. Třeštík, Kníže Václav

る[13]。

さて、ヴァーツラフを殺害した弟ボレスラフと彼の息子ボレスラフ２世は、ザクセン朝オットー１世の皇帝戴冠を契機として東フランク王国から変容していった神聖ローマ帝国に対して、時に反乱を起こしたが、10世紀後半のうちには最終的にその宗主権を承認するようになった。これ以降、ボヘミア大公は国際的には神聖ローマ帝国の一員としてもふるまうようになる。

このボレスラフ１世の娘ドウブラフカはポラニェ族のミェシュコ１世に嫁ぎ、ポーランド最初の年代記によれば、夫の改宗を導いた[14]。ポラニェ族（ピアスト家）の支配は、もともとヴィエルコポルスカにしか及んでいなかったが、ミェシュコの代にマウォポルスカ、シロンスク、ポモージェを統合してポーランド大公となり、彼らの息子ボレスワフ１世時代に王国として承認された[15]。ミェシュコはザクセン朝オットー１世とも良好な関係を築き、キリスト教導入をすすめた。しかし、彼はマクデブルク大司教座の管轄下に入ることを避けてローマへ使者を送り、教皇庁直属の地位を獲得している。その結果、1000年にはボレスワフが友好関係にあったオットー３世からグニェズノ大司教座の設置許可を得ることに成功した。これは帝国から政治面でも宗教面でも独立していることを意味した。

このように、ポーランドでは10世紀後半から11世紀にかけてキリスト教世界への参入がすすむ。ただし、改宗を推進したミェシュコは聖人君主とはならなかった。チェコでルドミラが聖人となっても、その夫ボジヴォイが聖人視され

---

nebo svatý Václav ?, in *Československý Časopis Historický* 36 (1988), pp. 238-247, F. Seibt, Václavské legendy, in *Český Časopis Historický* 88 (1990), pp. 801-823, P. Obrazová, J. Vlk, *Svatý kníže Václav,* Praha, 1994, J. Hošna, *Druhý život svatého Václava,* Praha, 1997. また近年もこの聖人への関心は継続している。P. Kubín (ed.), *Svatý Václav na památku 1100. výročí narození knížete Václava svatého,* Praha, 2010, P. Kubín, *Sedm přemyslovských kultů,* Praha, 2011, D. Stehlíková (ed), *Svatý Václav, ochrance české země,* Praha, 2008, P. Charvát, *Václav, kníže Čechů,* Praha, 2011.

[13]「彼はすべての貧しき者に善を施し、みすぼらしい衣服で、あまり食事せず、巡礼者を受け入れた。彼は寡婦を保護し、人々に憐みをかけて神に奉仕した者に必要物資や富を与え、多くの教会に金を寄進した」。Životy sv. Ludmily a sv. Václava, II.「孤児に慈悲深く、嘆き悲しむ者、寡婦の父であり、傷ついた者の親切な慰め手でもあった。彼は飢えた者に食事を与え、渇いた者に飲み物を与え、裸の者に自らの衣服を着せた。病人を訪問し、死者を埋葬し、見知らぬものや旅人も喜んで親族のように受け入れた。敬意をもって司祭や聖職者に仕え、正道を踏み外した者に正しき道を示した。さらに、彼は謙譲、忍耐、中庸、なかでももっとも重要な慈善を実践した」。Život sv. Václava (Crescente fide), p. 184.

[14] 荒木勝「『匿名のガル年代記』第１巻（翻訳と注釈）［第５章から第17章まで］」『岡山大学法学会雑誌』44巻２号（1994年）、334-287頁、第５章。

[15] 井内敏夫「第２章　中世のポーランドと東方近隣諸国」伊東孝之・井内敏夫・中井和夫編『世界各国史20　ポーランド・ウクライナ・バルト史』山川出版社、1998年、ここでは43-46頁。

なかった事例と類似している。ポーランドで聖人として崇敬されたのは、第一にはボレスワフの協力を得てプロシア地方で布教中に殉教したプラハ司教アダルベルト（ヴォイチェフ）であり、第二には11世紀後半に王に殺害されたクラクフ司教スタニスワフであった[16]。

さて、チェコやポーランドと事情の異なるのがハンガリーである[17]。中世ハンガリー王国の起源は、モラヴィア国家を滅ぼした遊牧民マジャール人に求められる。彼らは、パンノニア平原からさらに西方への襲撃を繰り返したが、955年のレヒフェルトの戦いにおいてオットー１世により打撃を受け、パンノニアに定着して国家を樹立することになった。アールパード家の大首長ヴァイクは、教皇と直接結びつき、エステルゴムに大司教座設置を認可された。また、1000年には皇帝からも承認を得て国王戴冠を果たし、ポーランドと同様の地位を築いた。なお、ヴァイクは洗礼後にイシュトヴァーンを名乗り、ヴァーツラフ同様、聖人君主として知られるようになる[18]。11世紀後半の彼の列聖に尽力したラースロー１世もまた聖人君主となり、ハンガリーは名実ともにキリスト教世界の一員となっていく[19]。

以上のように、ドイツの東方に位置する３か国は、チェコとポーランドは西スラヴの部族が建国したのに対して、ハンガリーは中央アジアから移動してきたマジャール人の国家であるという違いはあったが、いずれも西方のカトリック教会に属する形でキリスト教化を受容した。しかし、相対的に早く改宗したチェコがレーゲンスブルク司教座、のちにマインツ大司教座の管轄下に入り、神聖ローマ帝国にも帰属していたのに対して、ポーランドとハンガリーは教皇庁に請願して直接結びつき、またザクセン朝から独立した関係を樹立できたという違いがあった。また、地政学的にチェコがカトリック世界に包摂されていたのに対して、ポーランドは北方のバルト海沿岸の異教徒、そして東方のルーシ世界と接点をもっていた。また、ハンガリーも、クロアチア王国を征服して

---

[16] 井内「中世のポーランドと東方近隣諸国」、44-47頁。聖人に関しては、荒木「『匿名のガル年代記』第１巻」、第６章および同「『匿名のガル年代記』第１巻（翻訳と注釈）［第18章から第31章まで］」『岡山大学法学会雑誌』45巻２号（1996年）、812-775頁、第27章。年代記に関しては注37も参照。

[17] 薩摩「ドナウ・ヨーロッパの形成」、32-37頁。

[18] ハンガリーの年代記にはそのあたりの事情は書かれていない。L. Veszprémy, F. Schaer (ed. & trans.), *Gesta Hungarorum,* Budapest – New York, 1999. 羅英対訳版。同じように、チェコの年代記も、詳しいことは聖人伝に譲る、という形で奇跡に関する情報を割愛している。Kosmasův letopis český.

[19] 薩摩「ドナウ・ヨーロッパの形成」、45-47頁。

イタリアとの距離を縮めたのみならず、ビザンツ帝国やルーシとの外交関係を有していた。

3，東中欧におけるワイン生産と消費

東中欧3か国のうち、ローマ帝国の属州であったパンノニアに位置するハンガリーは、ローマ時代にブドウ栽培とワイン醸造が行われていたことが判明している[20]。もちろん、ローマ帝国の滅亡やモラヴィア国家の成立、さらにはマジャール人の移動と定着により農業技術に一定の断絶があったことに疑いの余地はない。それに対して、ローマの領域外に位置するチェコとポーランドには、ブドウの需要も栽培技術も到達していなかった。そのことは、チェコ最古の年代記である『コスマス年代記』における、「（古代のチェコ人は）ケレスとバッコスの贈り物を知らなかった」という記述からもうかがえる[21]。ケレスはローマ神話に登場する豊穣の女神、バッコスは酒の神であり、彼らの贈り物とは麦から醸造されるビールとブドウから醸造されるワインを意味している[22]。この記事は、チェコの神話的な時代について述べる中での言及であり、歴史的事実を直接証言しているわけではないが、西スラヴ人がビールやワインの飲酒文化を外部からもたらされたものとして集団的に記憶していた事実は読み取れる。実際、考古学的調査からも、西スラヴ人が自らブドウ栽培を始めたのは、7世紀から9世紀にかけてのこととされている[23]。その地はモラヴィア国家の中枢であるスロヴァキア周辺だったとされ、西スラヴの中でもポーランドでは中世を通じてブドウ栽培およびワイン醸造がほとんど行われなかった[24]。

---

[20] パンノニアでは、ローマ人の居住以前に、古代のケルト人もすでにブドウ栽培を行っていた。ただし、地中海とは環境が異なるため、ローマ人による品種改良がすすんだのは3世紀のこととされる。M. Beranová, *Jídlo a pití vpravěku a středověku,* Praha, 2007, p. 126. 注3でも触れたが、ローマ人は進出した先でのブドウ栽培に大きな関心を払っている。なお、これらの地域と同じように、ブドウ栽培の北限に位置するブリテン島の場合も、ローマ軍の駐留によりブドウ栽培がもたらされたとされる。ローマ軍撤退後にいったん衰退するが、6世紀にキリスト教が伝来するとミサの必要性からワインへの関心が高まったという。ブリジット・アン・ヘニッシュ（藤原保明訳）『中世の食生活』法政大学出版局、1992年、189-190頁。

[21] Kosmasův letopis český, I-3. なお、本章で紹介する史料の一部は、拙稿「中世チェコにおけるアルコール飲料――都市とビールの結びつき――」白幡洋三郎・錦仁・原田信男編『都市歴史博覧――都市文化のなりたち・しくみ・たのしみ』笠間書院、2011年、312-333頁の内容と重複する。

[22] ケレスの名はスペイン語でビールを意味するセルヴェッサや、ビール酵母の名前サッカロマイセス・セレビシエの語源となっている。

[23] Beranová, *Jídlo a pití vpravěku a středověku,* p. 126.

[24] M. Dembińska (trans. M. Thomas), *Food and drink in medieval Poland, Philadelphia,* 1999, p. 75.

チェコでワイン醸造が本格化したのは、10世紀以降、つまりキリスト教化の進行と並行してのことであった。証書史料に乏しい10世紀の状況はほとんど明らかになっていないが、11世紀あたりから君主や修道院などの発給した証書にブドウ栽培やワイン醸造への言及がみられるようになる。次の史料は1057年頃に大公スピチフニェフ２世が地方拠点に建立した教会に対して寄進したさまざまな財産の一部として触れられるものである。「２つのブドウ畑を、それらを耕作するに十分な数のブドウ作りとともに与える。……（リトムニェジッツェの）ザーサダ地区では、ブドウ作りKozelと畑を、ブドウ作りSstoianと畑を、ブドウ作りScepanと畑を」[25]。このようにブドウ栽培の専業農民とともにブドウ畑が教会に贈られた。11世紀から12世紀にかけて、この種の土地の所有権移動を示す文書の発給がいくつか確認できる[26]。

この頃の君主は特定の産物を貢納させるための奉仕人集落を設定していた[27]。次の史料は12世紀の偽造文書ではあるが、当時の様相を示すものとして捉えられる。「（大公ヴラチスラフ２世がヴィシェフラトの聖ペトロ・パウロ教会に）……Badreh村の７フーフェ（土地の単位）をブドウ作りのRadon、Nuzek、Csascsa、Lubgoztとともに、……Potliscimi村をブドウ作りRatostaとその息子、Pribissa、Quas、Misera、Ztrasとともに、……Lubosine村をブドウ作りCahotaとその息子たちPacとKoyとともに、……寄進した」[28]。詳細は省略したが、ブドウ作り以外にもビール作りや鍛冶屋、靴職人などが挙げられており、君主の館に供給されるべき貢納物のひとつとして、ブドウ、つまりワインが重要であったことを示している。この史料からは、教会にとっても、君主からの寄進として偽造するほどに、ブドウ畑を確保することが大事だったこともわかる。そのことは、12世紀前半に大公がヴィシェフラト教会を再建し、修道士を招聘したとき、あるいは13世紀前半にオロモウツ教会の助祭長が修道院に寄進したときに、当該修道士に対してワインの支給を確約したことからも明らかである[29]。彼らの生活にとってワインが必須のものであったことを示している。

修道院や司教がミサ用にわずかに醸造するのみで、基本的には中世を通じてワインは輸入されていた。今なお、ポーランドではほとんど醸造されていない。

[25] J. Erben (ed.), *Regesta diplomatica nec non epistolaria Bohemiae et Moraviae (RBM)* I, Praha, 1855, no. 124.

[26] G. Friedrich (ed.), *Codex diplomaticus et epistolaris regni Bohemiae (CDB)* I, Praha, 1904-07, no. 79, 111, 287, 308, 325など。

[27] 薩摩秀登『中世の王権と貴族』日本エディタースクール出版部、1991年、40頁。

[28] *CDB* I, no. 387.

[29] *CDB* I, no. 111, G. Friedrich (ed.), *CDB* II, Praha, 1912, no. 346.

チェコにおけるブドウ栽培は、12世紀半ば以降にシトー会が積極的に招聘されるようになったことで、いっそう促進されたと考えられる。11世紀末のフランスで産声をあげたシトー会は、寄進に頼らず自力開墾を推奨する改革派修道会として知られる[30]。12世紀に彼らは、「私たちの修道会の修道士たちが生活の糧をえるのは、手仕事（＝筋肉労働）を土地の耕作と家畜の飼育によらなければならない。そのことからして、自家用として、池、森林、ブドウ畑、牧場、一般の人たちの居住地から離れている土地、ならびに動物を所有することができます」（「シトー会総会決議事項」第14章）、「そのころ、修道院＝教会は土地、ブドウ畑、牧場、納屋などによって成長しました」（「シトー会修道院創立小史」第17章）と記している[31]。人口が少なく、未開墾地が多く残る東中欧は、中世にはドイツ人植民の主な目的地であり、シトー会もその一翼を担っていた[32]。ボヘミア北部やモラヴィア南部、そしてポーランドのシロンスク（シレジア）やハンガリーのトランシルヴァニアは、ドイツ人が多数入植した地域として知られている。

このような経緯を経て、13世紀中にはとりわけモラヴィア南部がチェコ国内におけるワイン生産地としての地位を確立していく。しかし、外国産ワインのほうが（おそらくは品質が良いために）人気が高く、国王は地元産ワインを保護するために、一定期間を過ぎるまではオーストリア産を飲むことを禁じていた（違反すれば罰金）[33]。14世紀からチェコを支配したルクセンブルク家は、モラヴィアだけではなくボヘミアやその他の領邦においても、外国産ワインに高い関税をかけている[34]。この頃になると、領主や聖職者だけではなく、ワインは市民の飲み物としても一般化し、プラハの徴税リストにはワイン給仕人affusor viniの名が登場するようになる[35]。

以上のように、チェコではおそらく９世紀にキリスト教改宗とともにワイン

---

[30] シトー会については、ルイス・レッカイ（朝倉文市・函館トラピスチヌ訳）『シトー会修道院』平凡社、1989年、レオン・プレスイール（杉崎泰一郎監修・遠藤ゆかり訳）『シトー会』創元社、2012年を参照。ただし、シトー会が東中欧の農地拡大に貢献したのは事実であるが、ブドウ栽培自体は他の会派も積極的に取り組んでいた。会派ごとのワインとの関係性については、スアード『ワインと修道院』を参照。

[31] 灯台の聖母トラピスト大修道院編訳『シトー会修道院初期文書集』中央出版社、1989年。

[32] 中世のドイツ人植民については、阿部勤也『ドイツ中世後期の世界』未來社、1974年、拙稿「『ハーメルンの笛吹き男』のその後」『秀明大学紀要』7号（2010年）、117-139頁を参照。

[33] J. Emler (ed.), *RBM* III, 1890, no. 1066.

[34] *RBM* III, no. 1077, 1178, J. Emler (ed.), *RBM* IV, 1892, no. 1760.

[35] *RBM* III, no. 288, 412.

が本格的に持ち込まれ、10世紀から11世紀にかけて君主や教会、修道院が儀式用および飲料用として生産に取り組むようになった。12世紀、13世紀には、シトー会やドイツ人植民の影響もありワイン生産が増大し、ようやく14世紀になると日常的に市民の口にも入るようになったのである。

なお、中世のハンガリー王国でブドウ栽培とワイン醸造が盛んになるのは、チェコと同じく、12世紀にドイツ人植民が進展してからのことと考えられる。14世紀になると、シレジア（ポーランド）へ、さらにバルト海を渡ってスウェーデンに輸出するまでに成長したらしい[36]。この交易網の確立には、ドイツ系市民のネットワークの存在も想定できよう。

4，年代記におけるワインの言及

ここからは証書資料に代わって年代記史料におけるワインへの言及を確認していく。年代記は多くの場合、教会の聖職者や修道士が執筆する。君主宮廷周辺の司祭が作者であることも多い。そのため、政治的な出来事とともに、宗教的な情報も収録されている可能性が高い史料であるといえる。

まずはポーランド最古の年代記から取り上げよう。12世紀前半に成立したとされる『逸名のガリア人の年代記Galli Anonymi Cronicae et Gesta Ducum sive Principium Polonorum』[37]には、実のところ、ほとんどアルコール飲料に関する記述がみられない。この年代記は建国の神話から、1113年までの出来事を取り扱っている。数少ない例として、始祖伝承として、２人の客人をもてなした農夫の話が伝わっている[38]。このとき客をもてなすためにふるまわれたのはビールcervisiaであり、ワインではない。そればかりではなく、この年代記にはワインがいっさい登場しない。既述のように、東中欧３か国のなかでも、ポーランドはとりわけ気象条件が厳しく、ブドウ栽培が行われていなかったことも影響していると考えられる[39]。

---

[36] ジョンソン『ワイン物語・上』、251頁。

[37] 注14、16で言及した荒木訳は羅和対訳版である。他の箇所の翻訳として、荒木勝訳「翻訳『匿名のガル年代記』（翻訳と注釈）」『岡山大学法学会雑誌』42-2巻（1993年）、46-1巻（1996年）、46-2巻（1997年）、47-1巻（1997年）、47-4巻（1998年）、48-1巻（1998年）。羅英対訳版としては、P. W. Knoll, F. Schaer (trans. & annot.), *Gesta principum Polonorum,* Budapest - New York, 2003がある。作者「匿名のガル」は、詳細不明のガリア人とされている。ポーランドの年代記に関しては、荒木勝『ポーランド年代記と国家伝承』群像社、2018年。

[38] 荒木「翻訳『匿名のガル年代記』第１巻」、第２章。

[39] 取引自体は行われており、1280年にはポズナン市にワイン貯蔵庫が存在したことが明らかになっ

次いでハンガリーの年代記に移ろう。ポーランドの年代記よりかなり遅れ、13世紀前半に編纂された『ベーラ王の書記によるハンガリー人の事績Anonymi Bele regis notarii Gesta Hungarorum』がある[40]。この年代記はマジャール人がパンノニア平原に到来し、征服していく過程の記録に重きを置いており、10世紀後半に進行するキリスト教化までは扱っていない。一方、13世紀後半に成立した『ハンガリー人の事績Gesta Hungarorum』は筆者が亡くなる1280年頃までの出来事を報告している[41]。この２つの年代記にはワインに関する記述が皆無である。どちらも中央アジア起源の遊牧民と考えられるハンガリー（マジャール）人とフン人を同一視してフン人の事績から語り始め、とくに前者は遊牧民としての軍事活動を描いている。もちろんキリスト教化した後に叙述された年代記であり、後者には改宗を進めた聖王イシュトヴァーンに関する記述も見られる。しかし、例えば勝利を祝って祝杯を挙げるような場面は描写されておらず、君主にとってアルコール飲料ないしワインがどのような意味を持ったのか定かではない。ワインを用いた宗教的儀式どころか、飲料としてのワインについても何も語っていない。

さて、最後はチェコの年代記である。12世紀前半に成立した『コスマス年代記Chronica Boemorum』[42]は、11世紀前半の司教の口を借りながら、悪事の根源として飲み屋を挙げている[43]。それ以外にも複数の箇所で言及している。例えば、1000年頃に君主に反抗的な家臣が酔っぱらって反乱をおこしたこと[44]、11世紀半ばにハンガリー王がチェコの公子を歓待して一緒に酒を飲んだこと[45]、12世紀前半に油断して戦場で酒を飲んでいたハンガリー軍を急襲したこと[46]などが挙げられる。しかし、いずれも酒の種類はわからない。ハンガリー王が提供した酒はmerumとあるだけで、ワインvinumとは明記されていない。

とはいえ、チェコの君主や貴族にとって飲料としてワインが望ましいもので

ている。井内敏夫「13世紀ポーランドの都市改革と「ドイツ法」」山本俊朗『スラヴ世界とその周辺』ナウカ、1992年、227-264頁。

[40] J. Bak, M. Rady (trans.), *Anonymi Bele regis notarii Gesta Hungarorum,* Budapest – New York, 2010. 羅英対訳版。

[41] 年代記の情報は注18。

[42] Kosmasův letopis český. 英訳としては、L. Wolverton, *Cosmas of Prague,* Washington D. C., 2014があり、おもにチェコ語訳から翻訳した和訳としては、浦井康男訳『コスマス年代記』成文社、2023年が刊行された。

[43] Kosmasův letopis český, II-4.

[44] Kosmasův letopis český, I-34.

[45] Kosmasův letopis český, II-16.

[46] Kosmasův letopis český, III-42.

あったことは、1158年に皇帝のイタリア遠征に従軍したさいの記述にみられる。聖ヴィート大聖堂の参事会員であったヴィンツェンティウスの記述によれば、アルプスを越えるさいに周辺で最良のワインoptimi viniを求めている[47]。チェコで生産されたワインよりも良質なものだという前提を読み取ることができる。また、14世紀初頭に成立した『ズブラスラフ年代記Chronicon Aulae regiae』は、チェコ王の政治的顧問という立場にあったズブラスラフ修道院の院長が書いたために政治的な情報を非常に多く含む[48]。この年代記によると、チェコの君主は周辺君主を招いた祝祭を開催するさいにはワインを用意していることがわかる。例えば、1292年にチェコ王ヴァーツラフ２世は、臣従しているシレジアのオポレ公の宮廷を訪問したさいに、同行したブランデンブルク辺境伯の手で騎士剣帯を締められた。このとき彼は大宴会を準備し、参加者の杯は酒で満たされた[49]。ここではワインとは明言されていないものの、この年代記をチェコ語に翻訳したヘシュマンスキーは、これをワインと解釈している[50]。その５年後に挙行されたヴァーツラフの国王戴冠式では、国内外の賓客を招くために、野外広場にワインの泉が設けられ、「望む者は川のようにワインを汲みだしたvinum more fluminis, qui voluit, hauriebat」[51]。この記述からみると、青年国王の重要な外交儀礼の場であったオポレ宮廷での宴会においても、やはりワインが準備されたと考えるのは自然であろう[52]。

なお、祝宴の豪華さ、君主の気前の良さを象徴するワインは、一転して贅沢や浪費といったイメージも帯びていた。ヴァーツラフ２世の同名の息子ヴァーツラフ３世はハンガリー王としても即位していたが、14世紀後半の年代記によると、10代後半の少年国王はハンガリー貴族の子弟に囲まれて悪習に染まり、夜な夜な酒盛りをして「酩酊するまでワインを飲んだvinum usque ad ebrietatem bibere」という[53]。

このように、ワイン後進地のチェコでは、豪華な祝祭を挙行するための必須アイテムとしてワインは認識されていたが、この奢侈品としてのイメージは一方で堕落と結びつきやすかったといえる。

---

[47] Letopis Vincenciův, in *FRB* I, p. 428.

[48] Kronika zbraslavská (Chronicon Aulae regiae), in J. Emer (ed.), *FRB* IV, Praha, 1884.

[49] Kronika zbraslavská, I-43.

[50] F. Heřmanský (trans), *Zbraslavská kronika,* Praha, 1976, p. 89.

[51] Kronika zbraslavská, I-63.

[52] ヨーロッパの他の地域でも宴会に良いワインが必要だという認識は共有されていた。ヘニッシュ『中世の食生活』、321頁。

[53] Kronika Ftantiška pražského, in *FRB* IV, I-18.

5，聖人とワイン

もともと旧約聖書のヘブライ的な世界では、ワインはどちらかというと堕落を促進する飲み物として位置づけられていた。「創世記」では、ノアが「農夫となり、ぶどう畑を作った」が、その後に「ぶどう酒を飲んで酔い、天幕の中で裸になっていた」（創世記9-21）ことを末息子ハムにみられ笑われるエピソードが有名である（図１）[54]。先ほどの少年国王のエピソードはこちらの系譜に属する。しかし、地中海のローマ帝国に広まっていく過程で、キリスト教文化はパンとワイン（およびオリーブ油）に特別な意味を認めるようになっていく[55]。新約聖書におけるイエスの言行はそれを後押しした。ただし食生活史家モンタナーリによれば、ヨーロッパの北方ではブドウを入手しづらいため、「聖人伝」文学

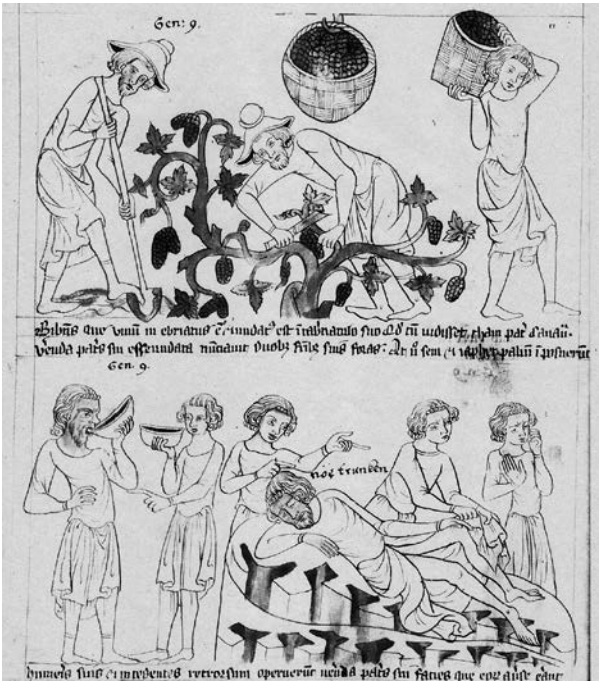

図１　ヴェリスラフ聖書（10v）

[54] 訳は『聖書　新共同訳』日本聖書協会、2004年から引用。図の出典は注76。
[55] マッシモ・モンタナーリ（山辺規子・城戸照子訳）『ヨーロッパの食文化』平凡社、1999年、37-44頁。

において、「ブドウの樹を植え小麦を栽培する」ことに尽力する人物が多く登場するという。また、ビール文化との衝突も見られるという。最初に述べたように、キリスト教化の進展とワイン文化の北上には関係性が指摘できるのである。

先に紹介したように、チェコの一連の年代記には君主の政治や外交、軍事の場におけるワインの情報を数少ないながら読み取ることができる。しかし、それよりも多いのがワインの出来に関する記事であり、聖職者の高い関心がうかがえる。『コスマス年代記』では１か所しか確認できないが[56]、『続コスマス年代記』として書き継がれた年代記群のなかでも13世紀の作者は、1251年から66年にかけて６度もブドウの不作（ワインの生産減）を報告している[57]。この時期から情報が増えるのは、13世紀後半からヨーロッパに小氷河期が訪れたことと関連していよう[58]。それはともかくとして、ワインを確保できるかどうかは、日常用の飲料――そのためだけならビールが代用になる――としてだけではなく、ミサのためにも必要な司祭や修道士にとって非常に重要であった。もともとブドウ栽培地ではないチェコにワインを導入するためには、自然発生的に普及を待っているのでは間に合わず、チェコの教会は地域の状況に適した推進方法を模索した。それが聖ヴァーツラフ崇敬との融合である。

ヴァーツラフは、既述のように、キリスト教布教に熱心であった10世紀前半の大公である。弟に暗殺されたのち、10世紀後半には教会スラヴ語、次いでラテン語で複数の聖人伝が成立している。当初は一般的なキリスト教的徳目を強調されており、960年代に成立した最古の聖人伝では、慎ましい生活を送ったこと、寡婦、貧者を保護したこと、教会や聖職者を大事にしたことが伝えられる[59]。聖人はキリスト教徒としての望ましい徳目や事績を実践するモデルとなるが、チェコ社会ではキリスト教化にあたって君主であるヴァーツラフがその役割を一身に担うことになった。そして、こうした事績に追加されたのが、ミサのためにパンとワインを自ら準備したというエピソードである[60]。この情報はプラハ司教座設立に関連して執筆された[61]「聖ヴァーツラフ伝Crescente fide」から登場する。

---

[56] Kosmasův letopis český, III-50.

[57] Letopisy české od 1196 do 1278, in *FRB* II.

[58] 井上周平「14世紀ヨーロッパのペスト」千葉敏之編『歴史の転換期５　1348年：気候不順と生存危機』山川出版社、2023年、66-119頁。

[59] 注13。

[60] Život sv. Václava (Crescente fide), p. 184.

[61]「聖ヴァーツラフ伝」執筆の背景については、拙稿「聖ヴァーツラフ崇敬の形成と利用」。

収穫の時期には、夜になると密かに畑へ行き、麦を刈り取り、それを肩に背負って家へ持ち帰った。それから脱穀して臼で挽き、小麦粉にした。真夜中には桶をもって、従者の一人とともに、水を汲みに行った。水を汲みながら言った。「聖なる父と子と霊の名において」。その後、彼は家へ持ち帰り、それを小麦粉と混ぜ、聖餅を焼いた。夜が明けてくると、彼は信者とともにブドウ畑へ急いだ。ブドウを摘み取り、籠の中に入れて密かに部屋へ運び込んだ。そこで圧搾機にかけてワインを搾りだし、容器に注いだ。彼は司祭がそれらを主へ捧げることができるように、誰にも知らせずにおこなった。

まさに、モンタナーリの指摘した「ブドウの樹を植え小麦を栽培する」聖人の姿そのものである[62]。この伝承により、ヴァーツラフはチェコにおいてワインの守護聖人となっていく[63]。君主自ら聖体を準備するエピソードは、「聖ヴァーツラフ伝Crescente fide」をさらに発展させた「グンポルトの聖ヴァーツラフ伝Gumpoldova legenda」にも引き継がれている[64]。こののち、「クリスチアヌスの聖ヴァーツラフ伝Křišťanův Život sv. Ludmily a sv. Václava」[65]など、11世紀から

---

[62] モンタナーリ『ヨーロッパの食文化』、39頁。なお、イシュトヴァーンは、修道女にブドウを栽培させるために、ベネディクト会女子修道院を創設したと伝えられる。スアード『ワインと修道院』、118頁。ただし、彼はワインの守護聖人とはみなされていないようである。D. Farmer, *Oxford dictionary of Saints,* New York, 2011(5th). ヨーロッパ全体でワインの守護聖人として名高い聖マルチヌス（注63）がパンノニア出身であるため、イシュトヴァーンを持ち出す必要がなかったためと考えられる。彼の聖人伝については十分に分析できていないため、前記以外のハンガリーの年代記の検討作業とともに他日を期したい。

[63] キリスト教世界全体では、毒入りワインで暗殺されかかった福音書記者ヨハネや、ブドウ畑に隠れて迫害者から逃れた聖ウルバヌスらがワインの守護聖人とされている。後者のエピソードはラングレー司教のものだが、祝日がブドウの開花期（５月25日）にあたる教皇ウルバヌス１世と混同されている。なお、植田重雄によると、ワインの守護聖人は彼らの他に、聖マルチヌスや聖ニコラウス、さらには聖キリアヌスや聖クリストフォルスなども挙げられるが、地方ごとにさまざまな聖人がワインの守護者として崇敬されている。植田重雄『守護聖者』中央公論社、1991年、169-180頁。おそらくこれは、ブドウ栽培の季節がヨーロッパの東西南北で微妙に異なり、重要な農作業に適したシーズンに祝日をもつ聖人が選ばれたものと考えられる。

なお、マルチヌスとニコラウスを除く４人の聖人は、1415年に始まるフス派戦争前のチェコ（ボヘミア、モラヴィア）においてほとんど教会を奉献されていない（総数2841のうち、ヨハネ８、ウルバヌス２、キリアヌス１、クリストフォルス１）。E. Popp, Die Patrozinien der böhmischen Länder in vorhussitischer Zeit, in *Bohemia* 13 (1972), pp. 44-130. ただし、ウルバヌスの２件はともに、相対的にブドウ栽培の盛んなモラヴィアの教会である。選択の理由は明らかでないが、ブドウ・ワインの守護を願われた可能性も否定できない。

[64] Gumpoldova legenda, 8, in *FRB* I.

[65] Křišťanův Život sv. Ludmily a sv. Václava, 6, in *FRB* I.

12世紀にかけて成立した聖人伝群もこのバージョンを採用し、チェコではヴァーツラフを、キリスト教化を推進した聖なる君主、そしてワインを根付かせた聖人とする解釈が一般化した。

ところで、チェコおよび西スラヴ固有の聖人はヴァーツラフ以外にも何人かいる。まず、先述のコンスタンティノスとメトディオスの兄弟は西スラヴ人の改宗を推進し「スラヴの使徒」と呼ばれたが、彼らの聖人伝にワインに関わる記述はみられない[66]。また、ヴァーツラフの祖母にして、いくつかの聖人伝では共に描かれている聖ルドミラも、その功績はもっぱらヴァーツラフの養育に焦点が当てられており、ワインに関連した事績は伝えられていない[67]。プロシアで殉教したためにポーランドでも篤く崇敬されていたプラハ司教ヴォイチェフ[68]（10世紀後半）や、スラヴ語典礼を維持したサーザヴァ修道院の院長プロコプ（11世紀前半）も存在する。モンタナーリは、「聖人伝」文学は「ブドウの樹を植え小麦を栽培する」司教や修道院長の姿を伝えると指摘した[69]が、ヴォイチェフもプロコプもその要件は満たしている。しかし、プロコプの聖人伝にはワインとの接点はみられない[70]。プラハ司教でありドイツやポーランドでも崇敬されていたヴォイチェフは、中世のチェコにおいて唯一ヴァーツラフに匹敵し得た聖人である[71]。彼の聖人伝には、ローマの修道院で過ごしたときに、同僚の嫌がらせを受けて運んでいたワインをこぼしてしまうエピソードがある[72]。にもかかわらず、このエピソードがヴォイチェフをしてワインの守護聖人に押し上げることはなかった。おそらく、ヴォイチェフの聖人伝は、プラハの教会主導ではなく、皇帝オットー３世のイニシアチブによりチェコ国外で執筆されており、その後もチェコでヴァーツラフの人気を上回ることはなかったのである[73]。

---

[66] 木村・岩井「〈翻訳〉コンスタンティノス一代記(1)」、同「〈翻訳〉コンスタンティノス一代記(2)」、同「〈翻訳〉メトディオス一代記」。

[67] Životy sv. Ludmily a sv. Václava, Utrpení sv. Ludmily. カレルによる聖人伝や年代記も同様の扱いである。

[68] チェコ外ではアダルベルトの名で知られる。皇帝オットー３世の信頼が厚かったことでも名高い。三佐川亮宏『紀元千年の皇帝』刀水書房、2018年。彼はドイツだけではなく、ポーランドでもハンガリーでも崇敬されている。荒木「『匿名のガル年代記』第１巻」、第６章。*Gesta Hungarorum,* 76.

[69] 注55。

[70] Legenda veršovaná o sv. Prokopa, Život sv. Prokopa, in *FRB* I.

[71] F. Graus, St. Adalbert und St. Wenzel, in *Europa Slavica-Europa Orientails, Festschrift für Ludat H,* Berlin, 1980, pp. 205-231; *Lebendige Vergangenheit,* Köln, 1975.

[72] Jana Kanaparia Život sv. Vojtěcha, 17, Brunonův Život sv. Vojtěcha, 17, in *FRB* I.

[73] 「聖ヴォイチェフ伝」成立の状況などに関しては、J. Nechutová, *Latinská literatura českého středověku do roku 1400,* Praha, 2000, pp. 52-59. プラハ司教座聖堂の聖ヴィート教会は、一時期

国内の教会勢力に選択されたヴァーツラフは、中世を通じてブドウ栽培を促進した聖人という立場を独占していた。

こうしたヴァーツラフの聖人像は14世紀に入ってさらに固定化される。ルクセンブルク家のカレル４世（カール４世）は、母方の祖先であるヴァーツラフの聖人伝を自ら執筆した[74]。その中でカレルもヴァーツラフが「ミサのためにパンとワインを自身の労力と手仕事により準備したpanem et vinum ad sacrificia missarum proprio labore et minibus excolebat」と描写した。この表現はカレルが命じて執筆させた年代記にも、まったく同じ文言で取り込まれている[75]。したがって、ブドウを育ててワインを醸造する聖ヴァーツラフ像は、教会のみならず、君主も公認したイメージということができる。

このイメージは聖人伝や年代記などの文字史料だけではなく、図像資料にも展開していく。カレルの外交官としても活躍した聖ヴィート大聖堂の参事会員ヴェリスラフが発注主とされる『ヴェリスラフ聖書Velislavova Bible』には、「創世記」や「出エジプト記」などの旧約聖書、そして「アンチキリスト伝サイクル」「キリスト伝サイクル」と続いた最後に「聖ルドミラと聖ヴァーツラフ伝」が描かれている[76]。「描かれている」というのは、文字通り、絵画メインの聖書であることを意味する。おもに赤青黄緑の水彩が施された線描画で、頁を上下に分割して聖書の場面が描かれている一方、文字は最大でも３行程度で、場面理解の補助としての役割を担っている。

さて、この９葉17頁にわたる「聖ルドミラと聖ヴァーツラフ伝」の中で、ヴァーツラフの敬虔なる事績を描いているのは４頁７場面である（fol. 183r-184v）。図２から５（の上）まで順番に、貧者や寡婦への喜捨、教会への寄進、麦の刈

「聖ヴィートと聖ヴァーツラフと聖ヴォイチェフの教会」と呼ばれており、ヴォイチェフがヴァーツラフと並ぶ崇敬を集める可能性はあった。Kosmasův letopis český, II-17. ヴォイチェフの崇敬が指示を集めなかった背景については、拙稿「聖ヴァーツラフ崇敬の形成と利用」を参照。

[74] A. Blaschka, *Die St. Wenzelslegende Kaiser Karl IV.: Einleitung / Texte / Kommentar,* Praha, 1934. 羅英対訳版に、B. Nagy & F. Schaer (ed.), *Karoli IV Imperatoris Romanorum Vota Ab Eo Ipso Conscripta et Hystoria Nova De Sancto Wenceslao Martyre,* Budapest – New York, 2001.

[75] Kronika Pulkavova, in J. Emler (ed.), *FRB* V, Praha, 1893, p. 18. カレルと年代記作者の関係については、拙稿「カレル４世時代の年代記にみる「チェコ人」意識――チェコの「ドイツ人」との対比から――」『西洋史学』第227号（2007年）、22-43頁。

[76] チェコ国立図書館所蔵。チェコ国立図書館が構築したデータベースManuscriptorum(Digital Library of Written Cultural Heritage)において図像は確認できる（https://www.manuscriptorium.com/）。なお、2007年にチェコのArcha90社が、300部のファクシミリ版を製作している。本稿で掲載している図像はすべてこのファクシミリ版が出典である。この聖書に関しては、拙稿「史料紹介と教材化：『ヴェリスラフ聖書』」『静岡大学人文論集』68巻２号（2018年）、23-60頁。

図２　ヴェリスラフ聖書（183r）

図３　ヴェリスラフ聖書（183v）

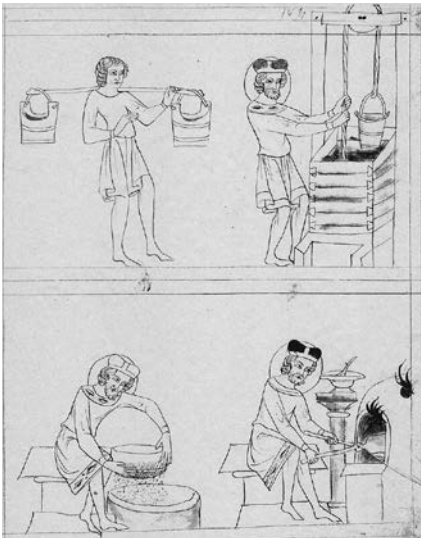

図４　ヴェリスラフ聖書（184r）

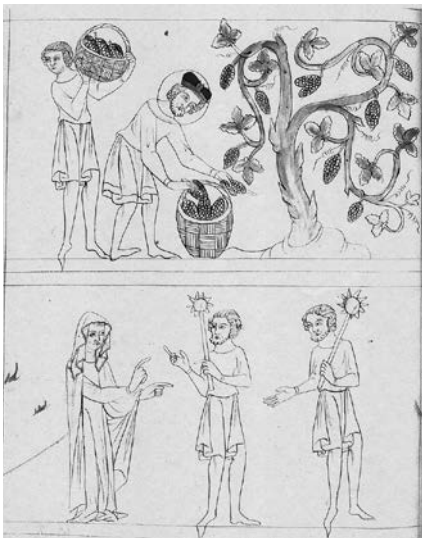

図５　ヴェリスラフ聖書（184v）

入れ、脱穀、水汲み、パン焼き、ブドウの栽培となっている。実のところ、カレルの聖人伝および年代記の文章表現はかなり簡潔で、ヴァーツラフがどのよ

うにワインと関わったのか、具体的な内容はイメージしづらい。しかし、同時代に成立したこの図像資料を見れば、「聖ヴァーツラフ伝Crescente fide」の記述が受け継がれていることは明瞭である。

『ヴェリスラフ聖書』においてブドウが登場する場面は他に、先ほど紹介したノアが息子たちとともにブドウを育てる場面と、「キリスト伝サイクル」の２つの場面（fol. 137v, 138v）のみである。後者はいわゆる「ブドウ園の農夫の例え」（マタイ21章、マルコ12章、ルカ20章）と呼ばれる。ある人がブドウ園を造って農夫たちに貸し、その後に収穫の一部を受け取ろうと人を遣わしたところ、その使者や他の者、さらには息子まで農夫たちが殺害したという寓話である。ブドウ園はイスラエル、農夫たちはイスラエルの指導者たち、使者が預言者、息子がイエスと解釈されている。最初の絵は主人がブドウ園を造っている場面、次の絵はブドウがイエスに差し出されている場面を描いている（図６）。

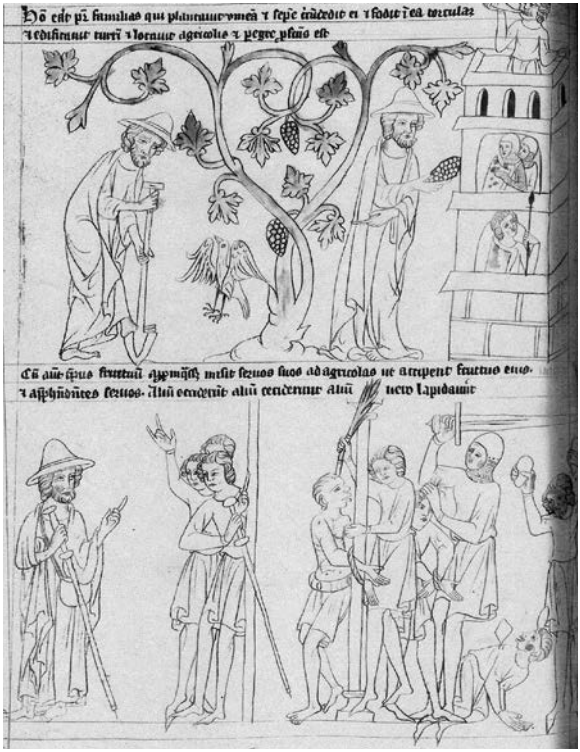

図６　ヴェリスラフ聖書（138v）

ここでのブドウは明らかに肯定的な意味を持っている。ひとまず『ヴェリスラフ聖書』では、ノアの酩酊というやや否定的なモチーフの他は、イエスとヴァーツラフに関連した場面でのみブドウが登場することを確認して次へ進もう。

カレルの時代には、もうひとつ重要な聖ヴァーツラフ像が登場する。図７は、カレルが帝国の宝物を収蔵するために建てた、カルルシュテイン城の階段に描かれた「聖ヴァーツラフ伝のサイクル」である[77]。圧搾機を用いてブドウの果汁を絞り出す聖人の姿が描かれている。このモチーフは、ブドウを圧搾するイエス像を模倣したものである。最後の晩餐でイエスがワインを自らの血に例えたため、ブドウの果汁はイエスの血を象徴するようになっただけではなく、圧搾して果汁＝血を絞り出す姿が十字架に掛けられて血を流す像を重ね合わされるようになった[78]。ほぼ同時代にカレルがプラハに建てたエマウス修道院の壁画には、このイエスの圧搾像が描かれている（図８）[79]。どちらの建造物／壁画

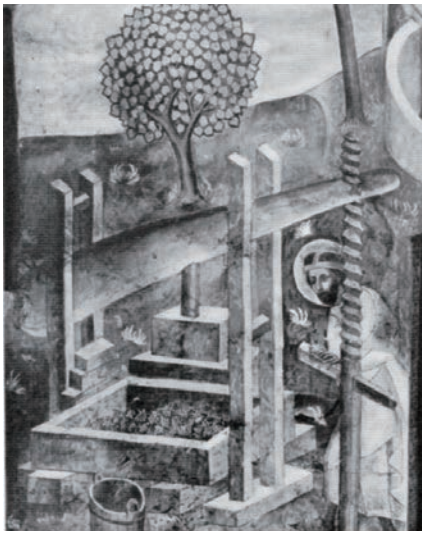

図７　ブドウを圧搾する聖ヴァーツラフ（カルルシュテイン城）

図８　ブドウを圧搾するイエス（エマウス修道院）

[77] カルルシュテイン城については、拙稿「聖人に囲まれた国王――ルクセンブルク朝カレル四世と聖十字架礼拝堂の聖人画群」高田京比子・田中俊之・轟木広太郎・中村敦子・小林功編『中近世ヨーロッパ史のフロンティア』昭和堂、2021年、215-242頁。

[78] ヴァーツラフ・フサ（拙訳）『中世仕事図絵』八坂書房、2017年、112-113頁。図７および図８も同書より転載。

[79] エマウス修道院の芸術については、K. Kubínková (ed.), *Karel IV. a Emauzy,* Praha, 2017.

もカレルの命により造られたものであることから、崇敬するヴァーツラフをイエスに準えようとした彼の思惑は明白であるが、ここでは、そのシンボリックな場面にワイン生産のプロセスが選択された事実に着目したい。

一般的に、イエスを真似た聖人の生涯には数々のモチーフがある。その中で何を取り上げて称揚するのか。そこには一定の幅がある。カレルがヴァーツラフの地位をさらに高めるために多くのエピソードの中からワイン圧搾の場面を選んだことは、14世紀のキリスト教文化におけるその重要性を物語っているといえよう。なお、当時のプラハは、カレルの国際的な活躍にともない、フランス、北イタリア、ブルゴーニュで発展した国際ゴシック様式の中心地のひとつであった。ヴァーツラフの殉教から400年以上たち、もはやキリスト教世界の辺境、キリスト教化の最前線という性格をすっかり払拭したチェコは、キリスト教的な位置づけを十分に踏まえたワイン文化を享受する地域へと変貌を遂げていたのである。

6，おわりに

最後に、本稿での検討結果を振り返る。

ブドウ栽培の北限に近い東中欧では、９世紀からキリスト教の伝来とともにワインの需要が増えた。なかでもチェコでは、10世紀以降に君主や司教、修道院が所領に専門のブドウ栽培者を置き、ワインの確保に尽力した。12世紀後半以降はドイツ人植民の影響もあって畑も増え、支配階層だけではなく市民の口にも入る飲料となっていく。しかし、年代記を読む限りでは、引き続きワインは貴重であり続け、祝宴の格を高める贅沢な飲み物として認識されていた。

教会はブドウ栽培およびワイン醸造を推進するために、列聖された君主ヴァーツラフの名前を利用した。彼の聖人伝には途中からブドウ栽培に関する記述が加わり、ヴァーツラフの敬虔な事績のひとつとして定着した。一方、司教ヴォイチェフもワインに関わるエピソードがあったにもかかわらず、彼がワインの守護者となることはなかった。中世初期のチェコ教会はキリスト教化およびミサを推進するために、その功績を聖人君主ヴァーツラフに仮託することで正当性を主張したのである。また、そうしたヴァーツラフの立場は中世後期になっても継続しており、自ら聖人伝を執筆するほど傾倒していたカレルの時代に決定的となる。彼はヴァーツラフを称揚するために、ブドウを圧搾して果汁＝血を絞り出すイエスと重ね合わせた姿を描かせた。中世初期には、ワインを普及

するためにヴァーツラフの盛名が利用されたが、キリスト教社会として宗教的にも文化的にも成熟した中世後期のチェコでは、逆にヴァーツラフ崇敬を一段と高めるためにシンボリックなワイン醸造場面が選択されている。こうしてチェコは、ビール文化圏であり続けながらも、ワインの宗教文化圏に包摂されたのである。